

# 結社誌を訪ねて

中原 修子

もてなしの旅の一夜の机唄

坂本 宮尾

「パピルス」夏号

パピルス主宰の冒頭作品のひとつで、「八戸えんぶり」と題が付けられています。えんぶりという語は、木製の柄杓のようなえぶり（柄振り）という農具に由来しています。机唄は、「えぶりうた」と読みますが、農作業の合間や、酒宴の場で即興的に歌われた民謡です。

坂本氏は、観光客としてではなく客人として招かれ用意された酒肴、地酒の盃にもてなされながら、地元の人々による余興の机唄に耳を傾けておられます。その土地の空気や、唄う者の魂、そして生きて働く人々の呼吸を作者は感じます。そして、その旅の一夜が終わり振り返った時、農具を持って色鮮やかな作業着に身を包んだ人々の踊りと、机唄の音が強く心に沁みついていた。机唄の音楽から八戸の様子を表した旅の記憶の作品です。

血川てふ戦址地名の畑余寒

岡本 欣也

「雪解」六月号

この作品は、「血川」という恐ろしい響きの言葉から始まります。この川一帯は、かつては戦いに明け暮れ、川の水が血に染まったほどの激戦地でした。滋賀県の姉川の戦いで織田信長に負け

て敗走した浅井・朝倉軍の血を流した川、あるいは平将門の妻や従者たちが自害した秩父の荒川の支流などにその名前が見受けられます。血が流れたその場所は、今は畑となり、人々はそこで戦いとは無縁の静かな日常を営んでいます。そして、この句の核心は、最後にぽつんと置かれた「余寒」という季語にあります。寒さはもはや盛りを過ぎ、春へと向かう途中にあるものの、なお冷気は人の肌を刺し続けています。まるで、過去の出来事はすっかり終わっていない、ここで起きた歴史を忘れてはいない、と言っているようです。この「余寒」という言葉を通して、岡本氏は地名に潜む戦いの記憶に思いを馳せ、死と営みが交差する風景を眺めておられます。

しゃぼん玉夕日の中の百の色

藤田真木子

「煌星」六月号

儼として繊細なしゃぼん玉が、夕日の光に照らされて無数の色彩を浮かび上がらせています。「百」という数詞は単なる百個ではなく、より多くの数であることを指しています。光の屈折によって現れる様々なしゃぼん玉の色合いと輝きは、微細で移ろいやすい脆さの美の象徴です。夕日は、一日の終焉が迫っていることを示します。しかしここでは、夕日の中に輝くしゃぼん玉によって、消えていく夕日は新たな命を宿すかのように表現されています。吹けば消えるしゃぼん玉ではありますが、そこへ夕日という時間の重みを重ねることで、「瞬間」という刹那と、「永遠」という長い時間の交差点が生まれました。

## 恋猫の水掛けられて帰り来し

久保 方子

「雉」六月号

発情期の猫は、春の夜に鳴き続けます。その鳴き声には、恥じらいも虚飾もなく、ただ本能のなすがままにつがいの相手を求めて行動しています。しかし、夜も更けて人々の寝静まる時間帯にはあまりにも騒々しく、みだりで、見苦しいものと、人間は感じます。そこで人は、猫に水をぶちまけ、騒々しい猫を黙らせようとしています。猫は水浴びやシャンプーが嫌いです。飼い主のいる自宅に濡れたまま戻ってきました。飼い主は濡れた体を吹いてやり、人々に迷惑をかけてしまう情けない猫に哀れを感じつつ、また明日も行くのだろうと猫の屈しない執念を感じておられます。人でも猫でも次世代へ命を繋ごうとする執念はとても強いのです。

## 母校先づ一勝の夜の生ビール

五明 昇

「水明」六月号

自分の過去と心情的に地続きの言葉である「母校」には、みな深い愛着を持っています。青春の思い出、若さのぶつかり合い、あるいは部活動で流した汗と涙などが一瞬で思い起こされるからです。高校野球予選会が始まり、みな仕事中でもインターネットの実況中継を横目で眺めつつ、母校の野球応援に余念がありません。失礼ながらあまり強豪校とは言えない野球チームのようですね。なぜなら一勝は当たり前で、優勝を勝ち取ろうという雰囲気はあまり伝わってこないからです。進学校であり、いつもは初戦で敗れてしまうことが多い母校の野球部。しかし、今回は初戦突破しました。「先づ一勝」という言葉が効いています。優勝でも、快

進撃でもなく、先ず今の一勝を素直に喜びたい気持ちに溢れています。これから先の厳しい戦いを考えるより、ようやく一歩を踏み出した安堵の気持ちで一杯なのです。大会は始まったばかりですが、一勝の祝杯は高らかです。今夜の「生ビール」は、ただの冷えた酒ではなく、過去の自分も含めた確かな欲びに満ち溢れています。

## 年輪の端の葉濡れてをり

梅津 大八

「罅」六月号

切り株の端から新たに芽吹いた「ひこばえ」が、雨や露に濡れている情景を詠んだ作品です。句の冒頭、「年輪の端」という表現が印象的です。年輪は木の生きた証であり、年輪を数えれば、長い年月をかけて育ってきた大樹であると分かります。しかし、老木化したためか、資源となるためか、伐採されてしまいました。もはやこの大木は以前の高さを誇ることはありません。木が茂っていた周りには太陽の光が注ぎ、大樹などなかったような明るすぎる空間が広がっています。しかし、よく見ると年輪の端から小さな若芽が生えています。元の木からまだ水分を貰えます。そしてそこから葉を出し光合成をすれば生きることが出来ます。木が伐られた後でも、再び芽を出すその姿は、「再生」や「希望」、あるいは「執着」をも示しています。葉は、過去と未来をつなぐ命のリレーです。木が長い年月をかけて刻んできた記憶の先端に、新しい命が息づいています。